

老人に対する意識について ——介護実習前後の学生の老人へのイメージ変化——

百 瀬 ちどり
Chidori MOMOSE

1 はじめに

介護福祉士の役割は『身体上又は精神上の障害がある者』を対象として『入浴、排泄、食事その他の介護及び介護に関する指導』を行うことと、介護福祉士法では唱っている。

一般に介護の対象者は高齢者という認識が浸透している。それは、現在、日本が世界に例を見ない程の急速な高齢化の進行により、人口構造及び生活構造が変化し高齢者をはじめとして、障害者、児童等の福祉へのニーズが多様化してきているからである。この状況に対応し、安心して生活できる長寿社会を築いていくための福祉サービスにおける人材の確保と質の向上を図る目的により介護福祉士が制定されたことが衆知だからであろう。

本学科に入学してくる学生のほとんどが老人や障害者と接してみ、世話をしたい、役に立ちたいという志望動機を述べている。

しかし、一方では核家族化が著明となり若者が日常生活の場で老人と接する機会が益々減少する傾向にあることも指摘されている。では、本学科に入学してくる学生達の老人観はどのようなものであろうか。又、専門教育の中で彼らの老人観は変化してゆくのだろうか。その2点につき、介護実習I期の特別養護老人ホーム実習を通し学生達の声聞く機会を得たのでまとめた。

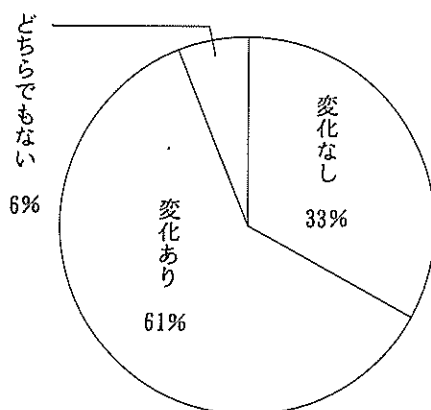
2 結果

1) 実習前後の老人のイメージ変化

入学時のアンケート調査によると大多数の学生が65歳以上の老人と接し話しをしたことがある。中学から高校の間にボランティア活動に参加し老人ホームを訪問したことがあると答えた学生は全体の8割に昇る。

同居、別居を問わず祖父母のいずれか、あるいは双方が健在な者は全体の87%であった。実習の前後で老人に対するイメージに変化がないと答えた者は全体の33%であった。そのほとんどが祖父母と同居している。イメージの変化を有りと答えた者は61%であった。(図-1)

図-1 イメージの変化

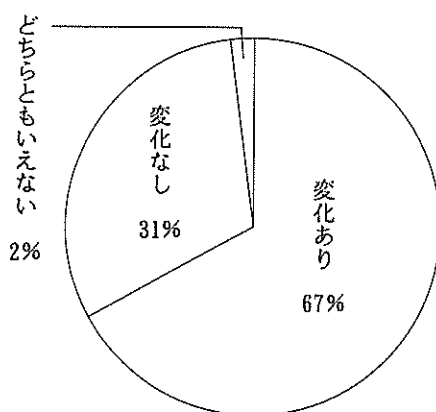


2) 祖父母への接し方の変化

イメージの変化と共に自分自身の祖父母に対しての見方、接し方に変化があったか、という質問に対し、変化があったと答えた者は67%、64名中42名であった。その主な内容は①会話を積極的に持つようになった（4名）②会話時、大きな声で話す（2名）③ゆっくり話すようになった（4名）④祖父母がくり返して言うことも素直に聞くことができるようになった（7名）等であり、会話に対する姿勢の変化が多くあげられていた。実習後では、祖父母の話し相手になる機会を積極的に持とうとしている。

変化がないと答えた者は31%、64名中20名であった。（図-2）

図-2 祖父母への接し方の変化



3) 変化したイメージの内容

実習の前後で老人に対するイメージに変化があったと答えた者の内容を受容、あるいは肯定的イメージ変化と拒否、あるいは否定的イメージ変化とに分けてみると前者の変化を答えている者は、イメージに変化のあった者54名中の52名と大部分であった。

ほとんどの学生が老人を思った以上に自立し、前向きに生きており個々の背景を考えて尊重してゆかねばならないと考えたようである。否定的イメージ変化をあげた学生は2名おり、老人との対人関係の難しさ、老人の弱さをあげている。

尚、イメージの内容に変化のなかった者の肯定的、否定的をみると、否定的内容で変化のなかった者はいなかった。実習前から肯定的なイメージを持っており実習の中でも肯定的に老人達を受けとめていたと思われる。

蛇足ながら、将来、祖父母、両親の介護・面倒をみたいか、みるつもりがあるか、という問には、3名の学生に迷っているという回答があったもののほとんどの学生がみる気であると答えている。

3 分析

1) イメージ変化について

本学科に入学してくる学生は高校時代までにボランティアで老人施設を訪問した経験を持つ者が多く、要介護老人に対するイメージも持ってきている者が多い。しかし、実際に専門職業人としての立場で老人達に接するとそのイメージは変化してゆく。実習の後にイメージの変化を認めている学生が全体の61%に及ぶ。これは学生達の持つイメージがその立場により変化してきたものと思われる。

第一段階として近親者の立場から、あるいは一般論的見方、社会常識的立場から持っていた老人のイメージといえるのではないかと。頑固であるとか、昔話をくり返す。諸機能の衰えによる弱いイメージがそれであり、祖父母と孫という関係においては世代間の隔絶もあり仲たうちとけることが困難である、という思いを持っていた者が多かったのではないだろうか。しかし、老人の世話をする、面倒をみるといったことに対しては前向きであり、このイメージが基礎となって次の段階へ発展していると思われる。第二段階はボランティアとしてのイメージである。ボランティア活動に参加し、老人や障害者の生活を見知ったことで、その生活やあり方がすべてわかったかのように思いがちだが、単発的に行うボランティアはほんの表面をのぞき見る程度のものであろう。受け入れる施設側もボランティアとして扱っており、特に中学生、高校生では相手になる老人もそれなりにみあった人を選んでくれるのではないだろうか。そのことにより良いイメージや感動を持つのだが、いわば傍観者の立場で考えることもあろう。そこから作るイメージは老人の全体イメージであり、要介護者はこういうものか、というおぼろげなイメージではないだろうか。

第三段階としてのイメージは専門職業人としての援助者立場から作られるイメージである。ここでは老人一般ではなく、個々の老人をその背景からしっかりと理解し接することで1人の人間として年を経てきた人を理解する。老人の個人としての人間的理解を基にしたイメージである。学生達のイメージ変化は老人全体、あるいは老人という言葉からのイメージであ

り、自分達の祖父母は生まれた時から老人としての役割関係の上からのイメージであって、援助者として接する際にはくいちがうことも多いのではないだろうか。そのことから大多数の学生がイメージに変化をもたらしたと思われる。

2) 祖父母への接し方について

実習後に祖父母への接し方が変わった、と答えた学生は42名であった。接し方の変化の基には、祖父母に対する理解の変化があると思われる。孫と祖父母。甘える関係が幼児期以降培われた関係であり、理解の流れは学生達が下手で理解してもらう側できたと思われる。しかし、実習の中で援助者として老人に接し、その諸側面から老人達を見、理解しようとした中で祖父母に対する態度にも変化が生じたと思われる。つまり理解する流れが学生達から祖父母へと向かったのではないだろうか。ともすれば一方通行になりがちな祖父母との関係が相互作用になり、話しを聴く姿勢を実習から学び、生活の場でも応用し活用しているのではないだろうか。

老人のさまざまな特徴を学ぶことで対応の方法を理解したことも影響しているであろう。

3) 変化したイメージの内容について

イメージは、『¹⁾生物が外界と絶えず対応関係を保つ間に、知覚を介してみずから形づくる精神の内容である』と藤岡喜愛氏は述べている。別の表現をとれば『²⁾あらゆるイメージは心の中で創造され、心の中で創造されたイメージは外界からの情報を知覚という形にまとめて、これによって形づくられ何ほどの外界模写性を結果として持つてしまう』のである。学生達が持っていた老人に関するイメージは、それまでの体験や出来事の中から知覚していた情報としての老人像である。

実習を通してその個人としての老人を理解しようと努め、先入観や色眼鏡なしの老人を見つめた時にそれまで持っていたイメージが変化したのであろう。むしろ、老人としての対象を考えるのではなく、目の前の対象を一人の人間、個人として考えようとした時に、たまたま長い人生を歩んできた人であった、というだけかもしれない。

老人のイメージは弱いもの、頑固でくどいという一般論的なものがある。けれど、ホームで生活している老人達は決して弱いだけの存在ではなく、その人なりの生を精一杯頑張っていることがわかる。頑固ではなく、順応力が低下しているのである。とか、記憶力が低下しているので同じことをくり返すのだという知識と理解のもとに接するのでは大きな差がある。いずれにしても、学生達のイメージの中の老人像が実習の後、肯定的に受容的に変化したのは専門職としての成長と、老人から学ぼうとする学生達の素直な姿勢の賜ではなかろうか。

4. まとめ

介護福祉士は1987年に「社会福祉士及び介護福祉士法」の成立により登場した職種である。国民生活にみられる多様化と個性化に呼応するかのように福祉をめぐる国民のニーズは益々複雑化、多様化、高度化の様相を呈しつつある。このような状況のもとで利用者のニーズを充足し、その要望に答えられる介護福祉士の養成が本学科の目指すところである。

実習をすることの大きな意義は机上の学習では学ぶことのできない個別性の理解である。介護は、対象の生活の支援が大きな役割であるが、生活はその人のその場へいかないと実際には理解できないものである。本学科の介護実習は2年間で10週、その内分けは大谷先生の実習報告を参照していただくこととし、今回の学生達のイメージ変化を追ったI期実習は1年次の後期9月より開始され通年で行われた。延べ10週間に及ぶ実習は、週1回ではあっても学生達が対象クライアントについて考える時間も長く、そのことがイメージの変化にも良い影響を与えたのではないだろうか。人間関係を良好に発展させるには、ある程度の時間が必要である。相互に理解しあい援助することがスムーズに、自然に行えるためには援助者のパーソナリティも関与するが特別な存在として意識するのには時間の長短は大きく影響すると思われる。週1日の関わりではあっても、その1日のために考える時間は長く、結果として良いイメージ作りに役立ったのではないだろうか。

イメージが藤岡氏のいうように知覚された外界の情報からの外界模写だとすると、老人に対する良いイメージは当然のことながら良いかかわり、援助へと結びつく。あるいは良い援助やかかわりができたので、良いイメージに変化したのかも知れない。

イメージが先行するか、援助活動が先行するのかを考えてみると、介護福祉士を志す学生達の初期の動機の中には決して老人に対する悪印象はない。しかし、実習を通して変化したことには援助活動が大きく関与しているであろう。祖父母と孫であれば自分の感情で拒絶したり容認したりができる。ところが、援助者と利用者という立場になった時には自分の方から対象を拒否することはできない。もし仮に対象から拒絶されることがあっても、である。そうであれば、一生懸命に受け入れてもらおうと努力し、何かできることはないかと目を向ける。それが学習であるが、又、自分の望んだ職業の内容でもある。

相手から受け入れてもらえるように臨んだことで、どうすれば受け入れてもらえるのかその人の背景を理解しようという努力の結果としての達成感も良い老人像への変化に関与している。とはいえ、学生達全員が良いイメージ、肯定的・受容的なイメージに変化したのではなく弱干名ではあるが、否定的イメージを持った者もいたことは、実習へのかかわりについての示唆を与えられたといえよう。

実習が達成感とクライアントとの相互理解や信頼関係により終えることができた者と、実習という限られた時間の中では対応の方向性がつかみきれずに終わった者とは老人に対する思いに多少の差があるのではないだろうか。人が人を理解する。ましてや老人達の生きて

きた歳月は現在の私達には理解し難い歴史の嵐のような時代であったろう。その時代を越えてある今を理解しようとする姿勢を持ち、人生に耳を傾けることが精一杯ではないだろうか。それにしても、自分の感情をぬきに、これ程の長い時間を老人のために費やしたことは学生達にとっては初めての体験であったと思われる。良いイメージは初期の対応によい影響を与えるのではないかという予想をたてたのだが、その点については今後の課題とし、機会を得て学生達の声聞いてゆきたい。老人観の形成には同居・別居はあまり影響せず、祖父母がいるか否かのみが影響するという研究報告もあるが、現在の日本はかつての大家族形態から核家族へと変化している。老人を中心とした家族形態は、老人を尊い又その先人の知恵に触れる自然な場を提供していた。そのため、人が老いることはごくあたり前であり、その時どう対応してゆくかは小さな頃から意識せずとも意識の中に育まれていた。時代の変化と共に、若者中心の社会の中で現在改めて高齢者対策といわれるようになって久しい。誰もが例外なく老いを迎えるのである。自分自身の老後をも想起して老人に対する良いイメージを持てるような、学生への関わりを考えてゆきたい。今後、さらに実習を重ね、より専門職に近づくに従い学生達の老人に対するイメージはどう変化してゆくのか興味深いものがある。

イメージが知覚を通し、それまでの体験から形づくられる外界模写であれば、対象がどんな人であったか、ということと知覚する主体としての学生なり私達のものの見方、考え方がイメージ作りに大きく関与しているであろう。その意味では、自分自身のものの見方考え方を振り返る機会を与え、自分という人間についての認識も再確認することも望ましい。

多くの点で、最も大きな学習の場は現場実習であり、学生にとって最大の効果を上げるための実習のあり方を検討してゆく必要も痛感する。全国に最初の介護福祉について学ぶことのできる大学ということでは、学習方法、内容について既成概念にこだわらずに最も良い方法を考えてゆきたいものである。その結果として、今後の社会、高齢化が益々著しくなってゆくと思われる日本の福祉ニーズに対応してイニシアティブをとれる福祉職者を卒業させてゆくことが大きな課題であろう。微力ではあるが、そのための努力をしてゆきたいと思う毎日である。

引用・参考文献

- 1) 藤岡喜愛、1984、『イメージ・その全体像を考える』、NHKブックス、P79
- 2) 同 上、P96
- 3) 岡本民夫、小田兼三、1990、『社会福祉援助技術総論』、ミネルヴァ書房
- 4) 日本看護研究学会、1991、『日本看護研究学会誌、Vol17』